

## 来て、見なさい

ヨハネの福音書 1章 35-51節

### はじめに

毎月第一週の説教は、「ヨハネの福音書」からお話することになっています。前回「ヨハネの福音書」から学んだのは、11月になりますので、前回の聖書箇所を振り返りながら学んでみたいと思います。

### 1. 伝道とは、人が自分でイエス様を経験するように導くこと

今日の聖書箇所には、イエス様がアンデレとペテロ、ピリポとナタナエルを弟子とするという出来事が書かれています。

中でもアンデレは、もともとバプテスマのヨハネの弟子でした。彼は、バプテスマのヨハネに促されて、イエス様について行くようになり、イエス様の弟子となったのです。

バプテスマのヨハネも含めて彼らは、イエス様と出会って、イエス様がどのような方であるのかを知っていきます。今日の聖書箇所で、イエス様について分かることがいくつかあります。①神の子羊。イエス様こそ、私たちの罪を償うためにいけにえとなってくださった方であること、そして天と地を結ぶ仲介者、神と人間を結ぶ仲介者であること。②メシア（キリスト）。イエス様こそ、旧約聖書で預言されていた救い主であること。③神の子。イエス様こそ、全知全能の神様のひとり子であること、などです。

彼らは皆、イエス様との交わりの中で、イエス様がどのような方であるのかを知っていきましました。人から聞いたのではなく、自分でイエス様と時間を過ごし、イエス様と語り合い、イエス様を知っていったのです。

バプテスマのヨハネは、イエス様が自分の所へ来られて、バプテスマを受けた時、御霊が鳩のように天から降って来て、イエス様の上に留まるのを見て、イエス様こそ「神の子羊」「神の子」であることを知ったのです。

アンデレも、バプテスマのヨハネから、イエス様こそ「神の子羊」であると聞いてイエス様について行きました。アンデレは最初、バプテスマのヨハネからイエス様について聞いただけの時、イエス様を「ラビ」（ユダヤ教の教師）だと思っていました。しかしイエス様に、「**来なさい。そうすれば分かります**」と言われて、イエス様が泊っておられる所で一晩一緒に過ごし、夜通し語り合うことを通して、イエス様こそ「メシア（キリスト）」であることを知ったのです。

ナタナエルはどうでしょうか。ナタナエルは、ピリポから「**私たちは、モーセが律法の中に書き、預言者たちも書いている方に会いました。ナザレの人で、ヨセフの子イエスです**」と聞いた時、

それを信じませんでした。「ナザレから何か良いものが出るだろうか」と言って、自分の常識、知識を信頼して、イエス様を信じませんでした。しかしピリポに、「来て、見なさい」と言われて、イエス様に実際に会って語り合うことを通して、イエス様こそ、自分のことをすべて知っている全知全能の「神の子」であることを知ったのです。

私たちも、イエス様について聞いたり、学んだりするだけでは、イエス様を本当の意味で知ることはできません。私たちはイエス様について学ぶだけではなく、イエス様を経験しなければなりません。イエス様を頭で理解するだけでなく、生活の中で経験しなければなりません。イエス様は過去の人ではなく、死からよみがえられて、今も生きておられる方であることを経験しなければなりません。イエス様を知識として知るだけでなく、経験として知らなければなりません。そうでなければ、私たちの信仰には何の力もありません。私たちの人生を変えることも、他の人に何の影響を与えることもできません。

教会は、イエス様を学ぶところではなく、イエス様との出会いを経験するところです。過去の偉人であるイエス様の教えや生き方を学ぶところではなく、今も生きておられる神の子の力を経験するところです。

イエス様はアンデレに、「来なさい、そうすれば分かります」と言われました。またピリポはナタナエルに、「来て、見なさい」と言いました。イエス様やピリポは、言葉で説得することはしませんでした。そうではなく、自分で経験することを求めました。そしてアンデレもナタナエルも、その言葉を信じて従って見た時に、イエス様の力を経験し、イエス様がどのような方であるかが分かったのです。

私たちは、「すべてが分かってから、信じて従おう」と考えます。しかしイエス様が求めておられるのは、「信じて従いなさい、そうすれば分かる」というものです。理解してから信じるのではなく、信じてから理解するのです。もちろん知識は大切なことです。しかし知識だけでは理解できないこともあります。信じなければ、また経験しなければ理解できないこともあるのです。

私たちは、祈りについていくら学んでも、実際に祈らなければ、祈りの力を知ることはできません。私たちはどうやってイエス様を経験するのでしょうか？まず祈ることから始めてみましょう。「イエス様、あなたについて教えてください」「あなたが今も生きておられる方であることを教えてください」。そして、神の言葉である聖書を読みましょう。私たちは、聖書についていくら学んでも、実際に聖書を読まなければ、神の言葉の力を知ることはできません。イエス様は、聖書の言葉を通して、私たちに必要な言葉を語りかけてくださいます。

私たちは、誰かに伝道する時に、その人自身にイエス様との出会いを経験してもらわなければなりません。ですから、言葉で説得するだけではなく、その人自身が、自分で祈るように、その人自身が、自分で聖書を読むように導くことが大切です。その人自身が、祈りが聞かれ、聖書を通してイエス様に語りかけられる経験をするなら、その人にとって揺るがない

確信となります。自分でイエス様を経験しなければ、その信仰はいつまでも曖昧で、確信のないものになってしまいます。そのような信仰は、自分を変えるものにもならないし、人に影響を与えるものにもならないのです。

伝道は、イエス様を経験した人にしかできないものです。イエス様を頭で理解しているだけの人には、できないものです。伝道とは、イエス様との出会いの経験を分かち合うことです。またイエス様との日々の生きた交わりの経験を分かち合うことです。決して知識を伝達することではありません。経験を分かち合うことです。

## **2. 伝道とは、人が人にイエス様を伝えていくこと**

ヨハネは、イエス様との出会いをアンデレに分かち合い、アンデレはイエス様との出会いをペテロに分かち合い、ピリポはイエス様との出会いをナタナエルに分かち合いました。彼らはいずれも、イエス様から「誰かに分かち合いなさい」と言われたわけではありません。彼らは、イエス様との出会いがあまりにも素晴らしく、誰かに分かち合わずにいられなかったのです。

イエス様との生きた出会いの経験は、自然と私たちを伝道へと導くものです。イエス様との生きた交わりと、伝道の情熱は一つに結びついているものです。私たちに伝道の情熱が冷めているなら、イエス様との生きた交わりについて、もう一度点検しなければなりません。

伝道とは、人から人へとイエス様を伝えていくものです。プログラムやイベントが伝道するものではありません。人が人を伝道するのです。人が人を伝道する教会は、プログラムやイベントが効果的に用いられます。しかし、人が人を伝道するのではなく、プログラムやイベントに依存して伝道する教会は、プログラムやイベントがうまく効果を発揮しません。

イエス様が伝道に用いられるのは、まずプログラムやイベントではなく、私たち一人ひとりです。人が人を伝道する時、最も効果を発揮するのです。しかもイエス様との生きた出会いと交わりを経験している人を、イエス様はよく用いられるのです。

私たちはまず、イエス様との生きた出会いと日々の生きた交わりを経験しなければ、決して伝道できません。そうでなければ、私たちの言葉や行いには何の力もありませんし、私たちの伝道は、単なる知識の伝達になってしまいます。

イエス様との生きた交わりは、日々のディボーションから始まります。毎日祈り、毎日御言葉を読む。そして祈りが聞かれ、御言葉を通してイエス様から語りかけられる経験することです。そして毎週の礼拝をささげ、毎月の聖餐式に与り、イエス様の林材を経験することです。そして毎月忠実に献金をささげ、イエス様に必要が満たされる経験することです。またイエス様に与えられた賜物を用いて奉仕し、互いに仕え合い、愛し合う経験することです。そのようにイエス様を信じ従っていく時に、私たちはイエス様を経験していくのです。

伝道は、人が人をイエス様に導いてくものです。私たちは今、誰かの救いのために祈っているでしょうか。私たちが今、誰かの救いを祈っていないのだとすれば、信仰の健全さを失っているのかもしれない。私たちは、誰か一人が良い、誰か一人の救いのために祈り続けてみませんか。一人が一人を救いに導ければ、クリスチャンは倍になります。私たちは、五人も十人も救いに導びこうと考えなくてよいのです。誰か一人の救いを、真剣に祈り続ければ良いのです。一人が一人を確実に救いに導くことができれば、私たちも教会も変わっていきます。どうか、最初は一年間で良い、一年間、誰か一人の救いのために真剣に祈り続けてみてはどうでしょうか。今も生きておられるイエス様が、私たちに答えてくださるのではないのでしょうか。

天におられる私たちの父となってくださった主なる神様。

イエス様との生きた出会いは、人を変える力があります。イエス様は、神の子であり、私たちの罪を贖う救い主です。どうかあなたとの生きた交わりを与えてください。あなたを頭で理解するだけでなく、生活の中であなたが今も生きておられることを経験させてください。そして私たちが、あなたとの生きた経験を分かち合うことができますように。

あなたは、人を救いに導くために、人をお用いになります。どうか私たちも、誰か一人の救いのために、真剣に祈り続けることができますように。

この祈りを、私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。